

令和元年度地域づくり海外調査研究事業調査報告書

山形県長井市における競技用けん玉の海外普及促進について

調査地：ドイツ デュッセルドルフ・アウクスブルク
調査日：令和元年９月２３日～３０日

一般財団法人地域活性化センター
総務企画部 人口・地域経済研究室 小松 純也

報告書概要

総務企画部 人口・地域経済研究室 小松 純也

調査テーマ

「山形県長井市における競技用けん玉の海外普及促進について」

調査の目的

派遣元である長井市では、公益社団法人日本けん玉協会が認定する競技用けん玉の生産量が日本一であることを活かし、けん玉を活用した交流人口の増加及び中心市街地の活性化を目指した取組を行っている。

近年、競技としてのけん玉は世界的に知られるようになり、海外からの需要もある。長井市でけん玉の製造・販売を行う有限会社山形工房は、競技用けん玉の海外売上比率を現在の4.5%から5年以内に15%程度に伸ばすことを目標としている。

長井市の一層の交流人口増加等の実現のため、姉妹都市のドイツのバート・ゼッキンゲン市との交流を活かし、ドイツ国内のみならず広く海外で競技用けん玉を普及させる可能性とその促進策について調査することとした。

調査結果及び考察

山形工房の競技用けん玉の販売を行う kaskaderos で顧客のニーズを、また、けん玉を含む日本文化紹介イベントが行われているデュッセルドルフ市の日本商工会議所で競技用けん玉の認知度についてヒアリングを行った。その結果、海外メーカーのけん玉と比較し、山形工房の競技用けん玉は、認知度・売上高ともに低いことが確認された。ドイツでは競技用けん玉より一回り大きい海外製のけん玉が好まれている。しかし、競技用けん玉で行われている級・段位認定をドイツ国内で審査する体制を整えることで、ドイツ国内での普及が促進される可能性があることがわかった。

このような調査結果から、次の三点を提案したい。

①ライセンス取得者の派遣による級・段位認定体制の構築及び普及活動

長井市在住の認定ライセンス取得者をバート・ゼッキンゲン市へ派遣し、派遣者が現地で級・段位の認定を行える体制を構築するとともに、ドイツ国内で広く普及活動を行う。

②競技用けん玉の配布及び啓蒙活動

バート・ゼッキンゲン市の小学校に競技用けん玉を配布し、上記の派遣者が現地でけん玉の持ち方や技の解説、級・段位の認定を行う。また、教育面・健康面での効果をアピールし、保護者や地元住民への啓蒙活動を実施する。

③けん玉世界大会の開催

広島県廿日市市で開催しているけん玉ワールドカップと同様の大会を長井市で開催することで、世界中からの訪問客や交流人口が増加し、市に対する認知度の向上等が期待される。

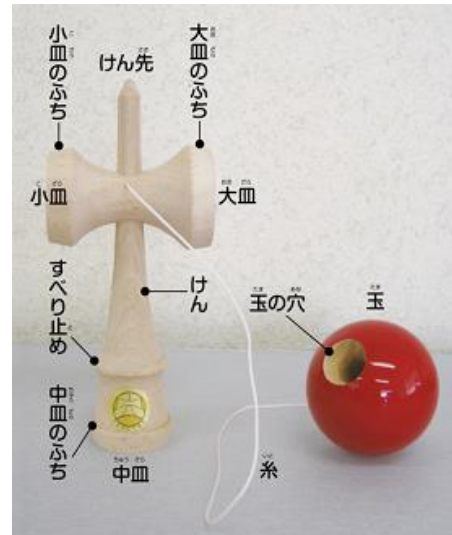
目次

1. はじめに	P 1
(1) けん玉について	
(2) 公益社団法人日本けん玉協会	
(3) 国内におけるけん玉を活用した取組	
2. 長井市の取組	P 3
3. 調査地の選定	P 5
4. 調査結果	P 5
(1) kaskaderos	
(2) デュッセルドルフ日本商工会議所	
(3) 公益社団法人日本けん玉協会（追加調査）	
5. まとめ	P 10
6. おわりに	P 11

1. はじめに

(1) けん玉について

昔ながらのおもちゃであるけん玉は、子どもの遊び道具として日本全国で親しまれ、各地でそれぞれの遊び方や競い合いの方法が誕生した。とりわけ国内では公益社団法人日本けん玉協会が認定する“競技用けん玉”が広く普及している。日本けん玉協会は、スポーツ競技としてのけん玉を広めるため、全国统一のルールと、認定けん玉の統一規格を定めた。当時、子どもの遊び道具としての認識しかなかったけん玉に、スポーツの要素と「けん玉道」の要素を取り入れたことで、競技用けん玉の本格的な普及が始まった。



▲競技用けん玉各部の名称

昨今、けん玉競技は技を競うだけでなく健康面でも注目されている。玉を皿でうまく受け止めるには、ひざを屈伸させる必要があり、この屈伸運動により足腰が鍛えられ運動不足の解消になる。さらに、けん玉の技を出すためには指先や頭を使うことから、脳が活性化され脳年齢の若さを保つことにつながる。こうしたことから、けん玉は健康増進や認知症予防のツールとして活用されており、近年は高齢者にも扱いやすいように皿の部分を大きくした福祉けん玉も開発されている。

また、けん玉は木育のツールとして教育面でも注目されている。木育とは「木を取り入れた生活の中で木と森に親しみ、人と木や森のかかわり、森林づくりの大切さを考えられる豊かな心を育む」教育活動である。秋田県由利本荘市の鳥海山木のおもちゃ美術館には「けんだまあそびのへや」が設けられ、来訪者が身近な木製玩具としてけん玉に親しんでいる。

近年は、海外でもけん玉が普及し始めた。きっかけは、アメリカのプロスキーヤーが来日した際、日本人選手が暇つぶしに興じていたけん玉に注目したこととされる。彼らが木製かつ独特のフォルムを持つけん玉を日本ならではの玩具としてお土産に持ち帰り、自国で遊ぶ様子をSNSに投稿して世界中に広がった。写真共有アプリ「Instagram」では70万件以上が投稿され、世界各地の若者らが独自の技などを披露している。また、現在では、アメリカやデンマーク等でもけん玉が製造されており、競技用けん玉より一回り大きなものやカラフルに塗装されたもの等、新しいスタイルのけん玉として海外で独自の進化を遂げている。

(2) 公益社団法人日本けん玉協会

日本けん玉協会は1975年、けん玉の普及、伝承を目的に童話作家の藤原一生氏によって設立された。そして、競技の公平性を確保するとともに、繊細な技を繰り出すことができるように開発されたのが競技用けん玉である。競技用けん玉には厳しい規格が定められており、検査に合格したもののみが認定けん玉とされ、公式大会の出場や級・段位認定会には認定けん玉の使用が義務づけられている。また、日本けん玉協会は、級・段位の認定制度を構築する一方で、学校教育におけるけん玉の活用にも取り組んでおり、特に小学校への普及に力を入れたことで、毎年小学生の全国大会（文部科学省が後援）を開催するまでに至っている。

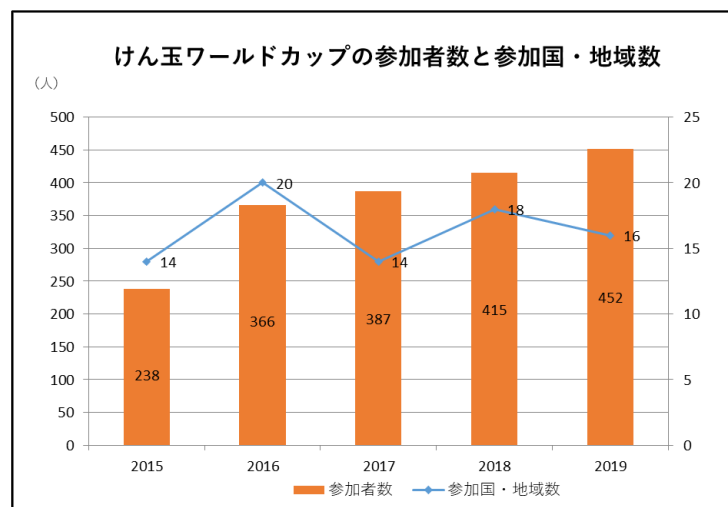
現在では、けん玉の伝承や授業・クラブ活動等の教育現場での活用促進、全国規模の各種大会の運営にとどまらず、国際交流のほか、近代スポーツとしての技術向上及び指導者の養成、健康増進・レジャー等の生涯スポーツとしての普及促進といった幅広い活動を行っている。

(3) 国内におけるけん玉を活用した取組

現在のけん玉の原型である「日月ボール」が製造されていた広島県廿日市市は“けん玉発祥の地”として知られ、最盛期には全国シェアの約7割にあたる年間30万本が生産されていた。その後、けん玉遊びが衰退する中で一度は生産が終了したが、2001年に廿日市市、はつかいち観光協会、廿日市商工会議所が連携して、けん玉製造を復活させた。2011年からは、市内のすべての小学一年生にけん玉を配布するなど、普及が図られている。また、廿日市市では、けん玉の世界大会である「けん玉ワールドカップ」が2014年以降毎年開催されている。この大会には、アメリカ、デンマーク、中国、台湾等、海外からの参加者も多く、その数も増加傾向にある。



▲日月ボール（左）と
競技用けん玉（右）



▲けん玉ワールドカップの参加者数と参加国・地域数

出典：一般社団法人グローバルけん玉ネットワーク

山口県周防大島町や三重県いなべ市では、地域おこし協力隊が中心となって、けん玉を活用した地域活動に取り組んでいる。周防大島町では、観光振興策としてアウトドアやスポーツの観点からけん玉を取り入れ、屋外でのけん玉体験会が開催されている。いなべ市では、地域活動の一環でけん玉クラブが発足し、地元住民に親しまれるとともに、稼ぐ公共事業・稼ぐ公共施設を目指し、地元産の木材を使った独自のけん玉開発に着手している。

この他にも、千葉県松戸市や群馬県前橋市などでは地元の有志によるけん玉教室が開催されるなど、けん玉の普及が図られている。このように、けん玉は全国各地で地域おこしや地域活性化の取組に活用されている。

2. 長井市の取組

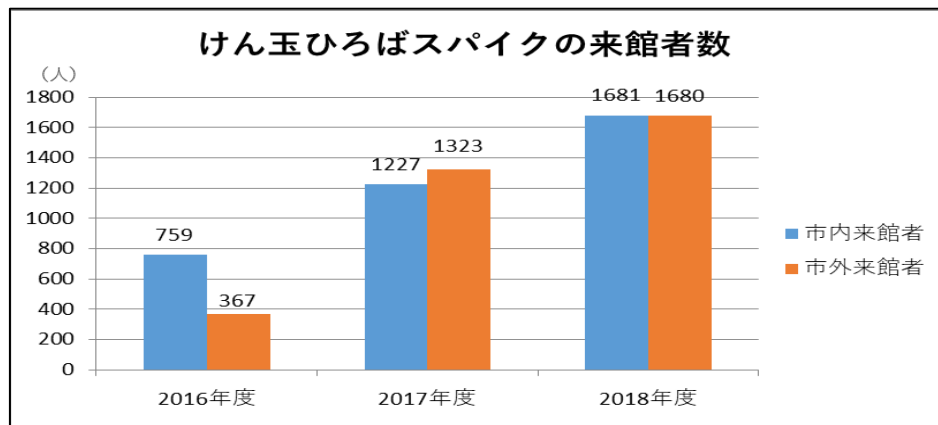
筆者の派遣元である長井市は、山形県の南部に位置し人口は約2万7千人の市である。市の北西端に大朝日岳があり、市域の西半分を朝日山地が占めるなど、豊かな森林資源を有している。当市では、豊富な森林資源を活かした木製けん玉の製造がかねてより盛んであり、1990年には競技用けん玉の生産量が日本一になるなど、けん玉製造が市の中心産業の一つとなっている。

当市でも人口減少や地域経済の疲弊が問題となっていることから、競技用けん玉生産量が日本一であることを活かすべく、2014年に“けん玉のふる里プロジェクト”を立ち上げた。これは、けん玉を活用した交流人口の増加と中心市街地の活性化を目指す取組であり、その一環として2015年に長井駅前の空き店舗を改修し、「けん玉ひろばスパイク（以下「スパイク」という。）」を設置した。



▲けん玉ひろばスパイクの外観（写真左）と内部（写真右）

スパイクでは、けん玉の有段者である地域おこし協力隊が活動し、けん玉の級・段位の認定試験やペインティングなどの体験・交流が行われていることから、市内外から多くの人を訪れている。

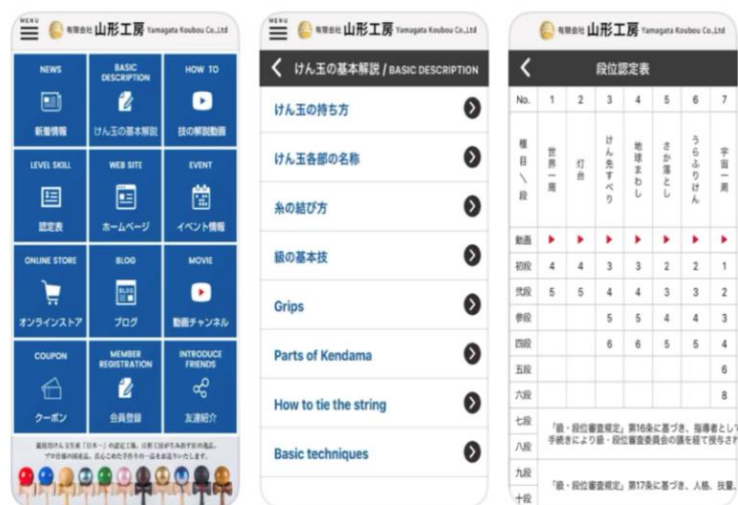


▲けん玉ひろばスパイクの来館者数 出典：長井市商工観光課

さらに、当市ではけん玉の技を成功させれば市内の宿泊施設、レストラン、カフェ等で様々な割引やサービスが受けられる「けん玉チャレンジ」の実施など、けん玉を活用して来訪者増加に向けた様々な取組を行っている。

当市でけん玉の製造・販売を行う有限会社山形工房は、豊富で美しい地元の木材資源を活かして社会貢献をしたいとの思いから、木製けん玉の製造に取り組んでいる。現在は、日本けん玉協会から認定された競技用けん玉の生産が日本一であり、全国シェア 70%を誇っている。

同社の代表取締役社長である梅津雄治氏によると、競技用けん玉に使用する木材にはこだわっており、耐久性・重さのバランス・音の響きを重視し、地元産を含めた東北地方のブナ・サクラを使用しているとのことであった。けん玉の認知度は世界的に高まってきているが、同社の海外売上比率は 4.5%程度であり、これを 5 年以内に 15%程度まで伸ばすことを目標としている。このため、近年は、海外のニーズに合うサイズやデザインのものも製造している。また、けん玉の基本解説や技を動画で観ることができるアプリを開発、けん玉の楽しみ方を広めたいという。このアプリは日本語と英語に対応しており、海外を含め広く普及する一助になることが期待される。



▲ (有)山形工房が独自開発したアプリ “大空”

3. 調査地の選定

前述のとおり、当市では交流人口の増加と中心市街地の活性化を目指し、競技用けん玉を活用した様々な取組を行っている。今後は、さらなる地域経済の発展を通じ、持続可能な地域社会を目指していく必要がある。そのためには、当市が強みを持つ競技用けん玉の普及促進や販売拡大が有効であり、特に他地域に先駆けて海外に目を向けることで、新たな市場の開拓・獲得につながると考えられる。このことは、普及拡大による新たな交流人口の創出に加え、宿泊や食事、土産品の購入等、幅広い産業への波及効果により、当市が目指す中心市街地の活性化にもつながるものである。

このような理由から、今回の調査では競技用けん玉の海外普及の可能性と促進策について調査することとした。長井市は、ドイツのバート・ゼッキンゲン市と姉妹都市提携を結び、市民訪問団を派遣するなどの交流活動を実施している。これを活かし、バート・ゼッキンゲン市を中心にドイツ国内で競技用けん玉を普及させ、ひいては広く海外への普及につなげる狙いで調査国をドイツに選定した。

ドイツには kaskaderos という玩具店があり、海外メーカーのけん玉とともに山形工房で製造された競技用けん玉が販売されている。このため、同店におけるけん玉の販売状況や顧客ニーズを調査し、ドイツ国内での普及の可能性を探る。また、デュッセルドルフ日本商工会議所では、日本の伝統文化の一つとしてけん玉を紹介する活動を行っていることから、けん玉がどの程度現地住民に親しまれているかなど、認知度について調査も行うこととした。

4. 調査結果

(1) kaskaderos

①概要

kaskaderos は、ドイツ南部のアウクスブルクに所在するレジャー用品やスポーツ用品を販売する店舗である。取り扱うけん玉には、デンマークの KROM（クローム）社製品、アメリカの SWEETS（スイーツ）社製品、山形工房で製造された競技用けん玉などがある。

店主のインゴ・ホフマン氏は、あるショーでけん玉を見たことがきっかけでドイツ国内でも普及させたいと思い、けん玉を販売するようになった。ホフマン氏自身も日本けん玉協会の認定段位（初段）を取得している。



▲対応してくれたホフマン氏
(右から二人目)

②顧客のニーズ

ドイツにおけるけん玉の販売動向についてヒアリングしたところ、海外メーカーのけん玉は人気があり売れ行きもいいが、山形工房の競技用けん玉はほとんど売れていないとのことであった。その理由として、ドイツ人には競技用けん玉は小さくて扱いづらいことが挙げられる。競技用けん玉は、競技の公平性のため、日本けん玉協会により大きさが厳しく定められており、規格を満たさないと競技用として認定されない。一方、競技用けん玉よりも一回り大きい海外メーカーのけん玉は、扱いやすく技も成功しやすい。この店舗を訪れる客は、けん玉コンテストに出場する実力者が多く、技の成功を重視するため競技用けん玉は選ばれにくくなっている。ただし、山形工房がこだわっているブナやサクラの材質は海外でも評価されており、綺麗な塗装が施されたものなどは観賞用としてのニーズがあるという。



▲棚に並ぶ競技用けん玉

③普及に関して

ホフマン氏によると、現状では海外メーカーの人気が高いが、現地顧客のニーズに合った大きさやデザインで製造すれば日本製けん玉は高級品として売れるだろうとのことであった。また、日本けん玉協会認定の級・段位がドイツ国内で取得できるようになれば、競技用けん玉が普及すると語る。こうした級・段位の取得は競技者の間でもステータスになるため、興味を持ってもらうきっかけや競技意欲の向上につながるという。

(2) デュッセルドルフ日本商工会議所

①概要

在外日本人商工会議所は全世界に 88 箇所あり、ヨーロッパには 17 箇所ある。そのうちの一つであるドイツのデュッセルドルフ日本商工会議所（以下「JIHK」という。）は、1966 年 3 月に社団法人として設立され、以来、在独日系企業の活動支援を行っている。

JIHK は、デュッセルドルフが州都であるノルトライン＝ヴェストファーレン州（以下「NRW 州」という。）所在企業を中心に 500 社を超える会員を擁するヨーロッパ最大規模の日本商工会議所である。NRW 州にはヨーロッパを代表する工業地帯であるルール地方があり、ケルン、



▲対応してくれた森氏
(左から二人目)

ドルトムント、エッセンなどの都市が所在する。ルール工業地帯の発展に伴って日系企業も多く進出してきた経緯があり、現在、デュッセルドルフ近隣には7～8千人の日本人が暮らしている。

JIHKの主な業務は、ヨーロッパにおける経済・法律・税務等をテーマにした情報誌の発行、会員企業向けに行うセミナーの開催、業種別部会による情報交換等であり、後述する「日本デー」のような、日本総領事館等と連携した取組も行っている。

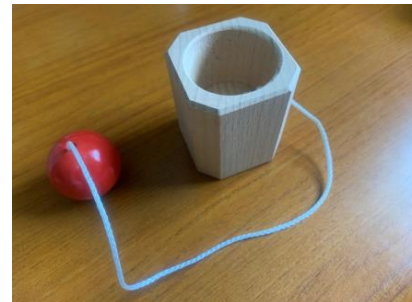
②日本デー

JIHKが日本総領事館等と連携して行っている取組に日本デーという市民文化交流祭がある。これは、2002年から開催されているヨーロッパ最大規模の日本文化紹介イベントで、デュッセルドルフの人口に匹敵する約60万人が来場する。日本デーでは、舞台での催し物やテント出展の他、けん玉など日本文化の体験等が行われている。中でも、着物の着付けや書道の体験は人気があり、近年はアニメキャラクターのコスプレイベントも主流となっている。

③普及に関して

JIHKの事務総長である森宏之氏によると、日本デーのけん玉体験コーナーでは興味を持って手にとってくれる人もいるが、ほとんどがその場で遊ぶだけで終わってしまうという。

ドイツにはクーゲル・ファングというけん玉に似たおもちゃがあり、昔から小さな子供に遊ばれているが、日本のけん玉は扱いが難しく、一部の大人が趣味として楽しむイメージが強い。こうしたイベントでけん玉を体験するだけ



▲クーゲル・ファング

では普及にまで至らないのが現状である。森氏は、競技用けん玉の普及のためには、まずは現地の小学校に配布し、子どもたちが日頃からけん玉に触れられるようにするなど、子ども同士で技を競い合えるような環境を整えることが必要ではないかと語る。

(3) 公益社団法人日本けん玉協会（追加調査）

帰国後、本調査結果を踏まえ、国内の対応状況を把握するため日本けん玉協会を訪問した。協会専務理事である堤早知子氏に話を聞いたところ、現在、級・段位の認定表は表1のとおりであり、日本に限らず海外での審査・認定も可能であるとのことであった。しかし、級・段位の審査や競技会の審判を行うためには、認定ライセンス（表2参照）を取得することが必要となる。

けん玉道級位認定表

この表は、10 回中の成功数を表しています。

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
種目	大皿	小皿	中皿	ろうそく	とめけん	飛行機	ふりけん	日本一周	世界一周	灯台	もしかめ(回)
10 級	1										
9 級	2	1									
8 級	3	2	1								
7 級		3	2	1							
6 級			3	2	1						(4)
5 級				3	2	1					(10)
4 級					3	2	1				(20)
3 級						3	2	1			(30)
2 級							3	2	1		(40)
1 級								3	2	1	50

例：8 級 大皿 3/10 回 小皿 2/10 回 中皿 1/10 回

けん玉道準初段認定表

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
種目	とめけん	飛行機	ふりけん	県一周	日本一周	世界一周	灯台	けん先すべり	もしかめ(回)
準初段	5	5	5	4	4	3	2	1	100



けん玉道段位認定表

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
種目	世界一周	灯台	けん先すべり	地球まわし	さか落とし	うらふりけん	宇宙一周	うぐいす	つるしとめけん	はねけん	一回転飛行機	一回転灯台	すべり止め極意	うぐいすの谷渡り	灯台とんぼ返り	つるし一回転飛行機	二回転灯台	自由種目	タイム競技 B 秒	もしかめ 回
初段	4	4	3	3	2	2	1	1	1	1										200
二段	5	5	4	4	3	3	2	2	2	2										300
参段			5	5	4	4	3	3	3	3	1	1							120	500
四段			6	6	5	5	4	4	4	4	2	2							60	1000
五段							6	6	6	6	4	4	3	3	2	2	1		45	
六段							8	8	8	8	6	6	5	5	4	4	3	*		
七段	「級・段位審査規定」第 16 条に基づき、指導者として長年にわたり活動し、かつ高度でオリジナルな技術を有し、指導者の育成に積極的な者に対し、一定の推薦手続きにより級・段位審査委員会の議を経て授与される。																			
八段																				
九段	「級・段位審査規定」第 17 条に基づき、人格、技量、識見が備わり、けん玉道の普及発展に貢献した者に対し、理事会の議を経て授与される。																			
十段																				

▲ 表 1 けん玉道の級・段位認定表

出典：公益社団法人日本けん玉協会

	資格内容		
	けん玉教室等の指導	競技会の審判	級・段位の審査
普及員	級レベルの技を指導できる能力を有し、それ相応の各種けん玉教室等の指導員を務めることができる。	主審・副審を務めることはできない。	準初段までの認定をすることができる。
2級指導員	初段・忒段レベルの技を指導できる能力を有し、それ相応の各種のけん玉教室等の指導員を務めることができる。	ブロック、都道府県等の競技会で主審・副審を務めることができる。また、上級指導員の指導の下で1級指導員の任務を代行することができる。	四段を限度とし自分の受有段位までの技量認定会で審査員長を務めることができる。また、上級指導員の指導の下で五段以上の認定会の審査員を務めることができる。
1級指導員	五段レベルの技を指導できる能力を有し、それ相応の各種けん玉教室等の指導員を務めることができる。	全国レベルの競技会で主審・副審を、ブロック、都道府県等における競技会で審判長・主審・副審を務めることができる。	五段までの技量認定会で審査員長を務めることができる。
A級指導員	技術理論に精通し、技のオリジナリティを評価・伸長できる能力を有し、各種のけん玉教室等の指導員を務めることができる。	全国レベルの競技会で審判長・主審・副審を務めることができる。	全ての技量認定会で審査員長を務めることができる。また、級・段位審査委員の候補資格を得る。
(特例) 高校生以上の有段者で活動会員の者	上級資格を有する者の指導の下で、受有段位に応じて各種のけん玉教室等の指導員を務めることができる。	上級資格を有する者の指導の下で、ブロック、都道府県等の競技会で副審を務めることができる。	準初段までの認定をすることができる。

▲ 表2 認定ライセンスの種類・名称・資格内容

出典：公益社団法人日本けん玉協会

また、認定ライセンスを取得するためには表3のような取得条件がある。初段を有しているホフマン氏は、普及員と2級指導員の取得条件を満たしているため、認定ライセンスを取得すれば現地で級・段位の審査が可能となる。認定ライセンスは、定期的に行なわれるライセンス講習会に参加し、合格して登録料を納付することにより取得できる。

堤氏によると、ホフマン氏のように認定ライセンスの取得を希望する外国人は多いという。認定ライセンスを取得した外国人が現地で級・段位の審査を行えば、競技用けん玉の海外普及につながる可能性がある。こういった希望者が大きな負担を負うことなく、容易に認定ライセンスを取得できる環境を整えることが今後の課題だと語る。

また、堤氏は、けん玉の大きさについて海外のニーズは把握しているが、競技用けん玉の規格を変える予定はないという。海外で好まれるけん玉は大きくて技を出しやすいが、その反面、飽きられるのも早い。けん玉競技が長い間親しまれているのは奥深く難しいためであり、技の追及こそが醍醐味である。このため、競技用けん玉の規格は安易に変更しないという。

	取得条件
普及員	1 初級資格講習会（普及員コース）受講時点で満 15 歳以上であること。 2 けん玉教室等の指導予定または指導経験があること。
2 級指導員	1 初級資格講習会（2 級指導員コース）受講時点で満 15 歳以上であること。 2 けん玉教室等の指導予定または指導経験があること。 3 初段以上の段位受有者であること。
1 級指導員	1 上級資格講習会（1 級指導員コース）受講時点で満 25 歳以上であること。 2 2 級指導員取得年度から 3 年以上経過し、別に定める活動実績を有すること。 3 2 について、年度毎の活動報告を直近の 3 か年以上続けて行っていること。 4 五段以上の段位受有者であること。 5 上級指導員 1 名以上及び居住する地域のブロック長の推薦を得ていること。
A 級指導員	1 上級資格講習会（A 級指導員コース）受講時点で満 30 歳以上であること。 2 1 級指導員取得年度から 5 年以上経過し、別に定める活動実績を有すること。 3 2 について、年度毎の活動報告を直近の 3 か年以上続けて行っていること。 4 A 級指導員 2 名以上及び居住する地域のブロック長の推薦を得ていること。

▲ 表 3 認定ライセンスの取得条件

出典：公益社団法人日本けん玉協会

6. まとめ

今回の調査結果を踏まえ、競技用けん玉の海外普及を促進するために、以下の三点を派遣元である長井市に提案したい。

①ライセンス取得者の派遣による級・段位認定体制の構築及び普及活動

海外で競技用けん玉が普及するには、世界各国で日本けん玉協会の級・段位が取得できる環境を整えることが必要である。級・段位の認定は現行に加え、ジュニア級として、海外の動向を踏まえた少し大きめの規格のけん玉による長井市独自の制度も新たに構築する。そのためには現地で審査ができる人材を育成することが課題となる。まずは、姉妹都市であるバート・ゼッキンゲン市との青少年交流事業の一環として、長井市在住の認定ライセンス取得者を派遣する。派遣者は日本けん玉協会と連携して現地で級・段位の認定が行える体制を構築するとともに、ドイツ国内で広く普及活動を行う。大人の趣味としてけん玉を楽しむ素地があるドイツ国内においてけん玉競技及び競技用けん玉の普及を図ることで、ひいてはヨーロッパ各国に伝わり、広く海外に普及していくことが期待される。

②競技用けん玉の配布及び啓蒙活動

けん玉を海外の生活・文化に長く根付くためには、上述の級・段位の認定体制の構築に加え、幼少期からけん玉競技に触れることが重要であり、学校や家庭で気軽に遊ぶ機会を

持てるように、バート・ゼッキンゲン市の小学生を対象に競技用けん玉を配布する。また、上述の派遣者が定期的に現地の小学校を訪れ、けん玉の持ち方や技の解説、級・段位の認定試験の審査を行う。さらに、けん玉競技を通じた教育面や健康面での効果をアピールし、保護者や地元住民への啓蒙活動を実施する。現地の小学生や住民がけん玉の技を競い合えるような環境を構築することで、けん玉文化の普及に結びつくと考えられる。

③けん玉世界大会の開催

けん玉発祥の地である廿日市市ではけん玉ワールドカップが毎年開催されており、国内外から多くの参加者が訪れている。長井市においても同様の世界大会を開催することで交流人口の増加が図られ、中心市街地活性化につながる。また、世界大会を開催することで、当市の認知度の向上、市民や関係者の競技用けん玉への意識・関心の高まりといった波及効果も期待される。

7. おわりに

今回、海外調査研究事業という貴重な学びの機会を提供してくださった派遣元の長井市と一般財団法人地域活性化センターに対して感謝を申し上げます。また、けん玉の普及について話を伺ったデュッセルドルフ日本商工会議所の皆様及びkaskaderosのホフマン様、細やかな気配りで視察を実りあるものにしてくださった現地通訳の池田様、貴重な資料を提供くださった公益社団法人日本けん玉協会の皆様及び有限会社山形工房の皆様、調査にご協力いただいたすべての皆様にお礼を申し上げて結びとする。

参考文献・資料

○長井市商工観光課「けん玉のふる里プロジェクト事業について」

○有限会社山形工房「けん玉ハンドブック」

○デュッセルドルフ日本商工会議所のホームページ

<https://www.jihk.de/ja>

○公益社団法人日本けん玉協会のホームページ

<https://kendama.or.jp/>

○一般社団法人グローバルけん玉ネットワークのホームページ

<https://www.gloken.net/jp/about/>

○広島県廿日市市のホームページ

<https://www.city.hatsukaichi.hiroshima.jp/soshiki/25/12070.html>

○広島県廿日市市移住定住情報サイト

<https://www.city.hatsukaichi.hiroshima.jp/site/citypromotion/23419.html>